（第３種郵便物認可）　神戸新聞　2022年（令和4年）6月

がん「光免疫療法」開発の小林氏

「英語は迫力と気合だ」

母校の灘校で生徒に講演

神戸

抗体と光を組み合わせてがん細胞を狙い打ちする「光免疫療法」を開発した米国立衛生研究所（NIH）主任研究員の小林久隆さん(60)が、母校の灘中学・高校（神戸市東灘区）で講演した。1980年の卒業以来、42年ぶりに同校の校舎に入ったという小林さん。開発した治療法自体の説明を「詳しくはネットや本で調べて」と横に置き、「英語は迫力と気合だ」などと、世界を相手に続けてきた研究生活のエピソードをにこやかに語った。

（霍見真一郎）

小林さんは灘高卒業後、京都大学医学部を経てNIHの研究職に就いた。2011年に開発した光免疫療法は、従来の手術、抗がん剤、放射線、免疫チェックポイント阻害薬―に次ぐ「第5のがん治療」として期待されている。

灘中・高では4日、「土曜講座」の講師の1人として講演。中学2年から高校2年までの70人が耳を傾けた。

冒頭、「物理と化学の違い、教わったことありますか」と投げ掛けた小林さん。「物理は、物の理（ことわり）と書き、物って何なのかという話だが、化学は化ける学問で、AがBになったときに何が起こるかという話」と続けた。

高校時代、化学に心を奪われ、医師にもなった経緯に触れながら「米国で基礎研究を続けるうち、化学と物理の間には未知のものがいっぱい転がっていると知った」と振り返った。

また「灘高時代は英語が苦手だった」と打ち明けた上で、世界トップクラスの米国研究機関で働く現状を紹介。「英語は、時制が間違っていようが、疑問文でもないのに発音で語尾を上げようが、自分の話していることが大事だと相手に思わせる迫力と気合が大事」と力を込めた。

光免疫療法については、医師らが集う学会で使うのと同じ英語だけのスライドを示して説明。生徒は熱心にメモを取っていた。

高校2年の京具弘（きょうぐひろ）さん(16)は「僕も英語はそれほど得意ではない」と言いつつ、「英語ができなくても世界で活躍でき、学問が共通のコミュニケーション手段になると聞き、理系科目でも世界と話し合えるのではないかと思った」と話した。

▲母校の後輩を前に研究生活のエピソードを語る小林久隆さん＝神戸市東灘区魚崎北町8